噶爾丹を征す

しが僧格の弟噶爾丹之を殺して自立し遂に四部を併有し南、回部を攻撃し東喀爾喀の土謝圖汗を襲破し又其鄰部右翼車臣汗、左翼札薩克圖汗を撃破す是に於て三汗の部落盡く東に奔り關を款きて降を請ふ噶爾丹も亦使を遣はして入貢したりしかハ詔して喀爾喀の侵地を返さしめむとす噶爾丹驕蹇にして詔を奉せず喀爾喀を追ふを名となして東犯す帝依て親征の詔を下し裕親王福全左翼となり恭親王常寧右翼となりて進みたり噶爾丹右翼の兵を破りて南し烏蘭布通に侵入す官軍進み戰ひて大に其兵を破りしかハ噶爾丹科布多に走れり會帝疾あり師を班す（同廿九年）既にして帝又塞を出てヽ多倫泊に至り喀爾喀の諸酋長の朝を受け其三部を以て三十七旗となす（同三十年）帝噶爾丹の來りて會盟に參せむヿを望みしが噶爾丹報せず益喀爾喀を侵畧し且

再噶爾丹を征す

內蒙古を嗾して叛せしめむと謀れり（同卅三年）尋て噶爾丹三萬騎を以て入寇し克魯倫河に沿ひて下り巴顏烏蘭に至れり（同卅四年）帝また親征し大兵を率ゐて中路より將軍薩布素東路より大將軍費揚古西路より共ニ夾攻せむヿを約す

帝遂に克魯倫河に至りて方略を指示す噶爾丹大兵の至るを見て營を拔きて去りしが又西路の師に破られ數十騎と共に遁れ去れり帝費揚古に命し科圖に留まりて喀爾喀の地を護せしめ遂に師を班したり噶爾丹喀爾喀を破りしより其地に留まりて歸らず故に其舊部（伊犂の地）の地は兄の子策妄拉布坦に併せられ又連年清兵と戰ひて精銳を失ひしかは回部青海等皆背きたり噶爾丹西、伊黎に歸らむとすれは策妄拉布坦の據るあり南西藏ニ投せむとすれハ道遠くして達する能ハず北、露西亞に赴らむとすれは露人受けず且計畫

噶爾丹の死

する所皆功なく其勢大ニ衰へたり帝依て招き降さむとし鄂爾斯に至りて諸部を諭しヽに噶爾丹使を遣はして來りしが自から至らず（同卅五年）帝依てまた寧夏に幸し費揚古等を遣はし兩路より進討す噶爾丹進退谷まりて遂に藥を飲みて死し其所部盡く降り阿爾泰山以東は版圖に歸す帝遂に凱旋せり（同卅六年）後殆十年を經て策妄布拉坦の兵哈密の北境ニ至りて五寨を侵掠したりしが官兵の來り援ふを聞きて遁れ去れり（同五十四年）策妄拉布坦また土爾扈特、和

西藏を定む

碩特の二部を併せ自立して準噶爾汗となり兵を遣はして西藏に入り拉藏汗を襲殺す是に於て帝又兵を西藏に出すに至れり

帝西藏の青海雲南四川の屏蔽なるを以て厄魯特をして據らしめハ邊境の安からさらむことを恐れて遂に皇子允禵を遣ハし青海に屯して兵餉を治し將軍傅爾丹、富寧安ハ兩路より西藏の北に至り將軍噶爾弼ハ四川より將軍延信ハ青海よりして西藏に向ふ諸部の酋長降附するもの多く遂に西藏の地に入れり葛爾弼副將岳鐘琪の計を用ひ土司を招きて前驅となし進みて番兵を破り兵を分ちて險を扼き延信も亦途上の賊を破りて進みしかハ厄魯特の兵前後敵を受けて大敗し舊路より北に走り伊黎に歸るを得たる者ハ半數に及ハさりき是に於て達賴喇嘛を封し盡く厄魯特喇嘛の逆を助けたる者を誅し蒙古の兵二千を駐留し拉藏汗の舊臣貝子康濟鼐をして前藏を掌らしめ台吉頗羅鼐をして後藏を掌らしめ西藏始めて平定に歸したり（同五十九年）其後遂に駐藏大臣を置くに至れり（雍正の時に始まりて乾隆の時に定まれりと云ふ）

臺灣を平く

西藏平定の後幾もなくして臺灣に朱一貴と云ふ者あり兵を起して中興王と稱し臺灣全島を陷れたりしが水師提督施世驃兵を率ゐて進討し盡く其亂を平け朱一貴を擒にせり又苗族の叛きしことありしも皆平定せられたり帝の武功の盛なること既に此の如く而して文勳も亦燦然たる者ありき

康熙の文勳

帝天資英邁にして幼少より學を好み老後に至りても手より卷を釋かす故に才藝頗人に優れたり曾て大に碩學鴻儒を集めて編纂の事に從事せしめ佩文韻府、淵鑑類函、康熙字典等の大編述を成せり是れ一は帝の學を好めるに出つと雖も亦一は人心を收攬する政略なるべしといふ帝又儒教を尙びて漢人の心を收め且佛教によりて蒙古を治めたり其他政治上觀るべき者少なからす蓋清室の基は帝の時に至りて成れりと云ふべし帝在位六十一年にして崩し皇子胤禛立つ是を世宗皇帝と云ふ

第三節　西域の平定

世宗の時に方りて青海の羅卜藏丹津反して諸部を下し遂に西寧を犯す帝川

青海を平く

準噶爾を征す

陜の總督年羹堯に命し四川の提督岳鐘琪と共に勦討す鐘琪大兵を率ゐて青海に至り大に敵兵を破りしかハ羅卜藏丹津逃れて準噶爾に投す（雍正二年）帝使を準噶爾に遣ハして羅卜藏丹津を索めしに策妄拉布坦拒みて命を奉せす既にして策妄拉布坦死して其子噶爾丹策零立ちしが屢邉を犯す（同五年）帝依て傅爾丹を靖遠大將軍となし岳鐘琪を寧遠大將軍となして西北の兩路より準噶爾を征す（同七年）策零西路の軍の備なきに乘して科舍圖を犯しゝが利あらす（同八年）傅爾丹進みて科布多に城く策零兵三萬を遣ハして北路を犯し我前鋒を破りて大營に薄りしかハ諸軍大に潰敗す帝依て順承郡王錫保をして傅爾丹に代らしめて科布多の營を察罕瘦爾に移す策零の兵勝に乘して東進し喀爾喀を犯す郡王策凌等兵を出して賊を破り城を各處に築きて山南の衝を扼す（同九年）尋て策零大兵を率ゐて入寇し策凌の軍を襲ひて大敗し圍を突きて遁れたり帝多羅平郡王福彭をして順承郡王に代らしめ又岳鐘琪を召し還し張廣泗を寧遠大將軍とす尋て查郞阿を定遠大將軍とす（同十一年）張廣泗將とな

準噶爾と和す

準噶爾を征す

りて軍勢大に振ひ準噶爾の兵を布隆吉大坂に破れり（同十二年）策零使を遣ハして和を乞ふ帝依て策凌查郞阿を召還して諸王大臣と議す策零阿爾泰山の故地を得むとしたりしが廷議許さず使者往返して始めて阿爾泰山を界とし喀爾喀の游牧も界西を過くるを得す厄魯特の游牧は界東を過くるを得ざるを約しさり又貴州に苗族の亂ありしが皆平けられたり帝在位十三年にして崩し太子弘曆立つ是を高宗皇帝と云ふ

高宗の時に至りて策零死し那木札爾、刺麻達爾札相つきて立ち國内平ならす時に策妄拉布坦の外孫に阿睦撒納と稱する者あり竊に伊黎に入りて刺麻達爾札を殺し達瓦齊を擁立して雅爾に居れり（乾隆十年）後阿睦撒納居と額爾齊斯河上に移し自立を計りて屢伊黎を侵しゝが達瓦齊に破られて抗する能はず遂に所部を率ゐて來奔し帝に見えて伊黎取るべきの狀を申す帝依て意を決して準噶爾を征す（同十九年）班第を定北將軍となして北路より永常を定西將軍となして西路より進攻す阿睦撒納も亦從ふ兩軍各部落を下し直ちに伊黎

準噶爾を平く

に向ふ達瓦齊戰敗れて氷嶺を踰え烏什に至りしが其酋長霍吉斯に執へられたり既にして阿睦撒納清兵の稍撤去せしを見て自ら西域を制せむとし伊黎に據りて兵を擧く將軍班第及ひ駐防の兵皆戰敗れて死す（同二十年）帝策楞、達爾黨阿をして相つきて討伐せしめたりしが皆功を成す能はず（同廿一年）依て更に定遠左副將軍成袞札布をして北路より兆惠をして西路より進討せしめたり兆惠等敵を破りて遂に哈薩克に至れり哈薩克汗阿布賚大に恐れて來貢し阿睦撒納を擒にせむとす阿睦撒納遂に露西亞に走りて死しぬ是に於て成袞札布に命して烏里雅蘇台を鎭す準噶爾全く平きたり（同廿二年）既にして又回部の亂起れり

初め喀什噶爾の領主「ア、フメット」に二子あり長を布羅尼特と稱し次を霍集占と稱す二子策零に執ハれて伊黎に在りしが清兵の準噶爾を征するに方り舊部を回復せむことを清將に申請し兵を率ゐて天山の南に至り遂に喀什噶爾を復し葉爾羌を復す後阿睦撒納の兵を起すに及ひて霍集占ハ伊黎にありて逆

回部の亂

を助けたりしが其兵の敗るゝに至り喀什噶爾に還り兄に勸めて獨立の計をなし檄を各城に傳へ遠近を下し遂に庫車に據れり（同廿二年）帝雅爾哈善を靖逆將軍となし滿漢の兵を率ゐて攻めしめたりしが功をなす能はず依て雅爾哈善を誅し兆惠に命して進討を時に霍集占ハ葉爾羌に走り布羅尼特ハ喀什噶爾に走れり兆惠進みて葉爾羌に至りしに賊兵來りて城中と夾攻す兆惠人を阿克蘇に遣ハして急を告く副將富德其報を聞きて赴き援け大に賊兵を破れり兆惠も亦援軍の至れるを知り圍を潰して援軍に合し阿克蘇に還れり（同廿四年）既にして兆惠富德と兵三萬を率ゐて兩路より並進す布羅尼特兄弟遂に城を棄てゝ西遁し敖罕に投せむとして能ハず巴達克山に赴きしが清兵追撃して又其兵を破れり巴達克山の酋長其兄弟を擒にし遂に其馘を送り且欵を通す

回部を平く

是に於て回部悉く平きたり喀什噶爾を以て參贊大臣建牙の所となして南路の各城を節制し大城にハ辦事大臣を設け小城にハ領隊大臣を設けたり（同廿七年）回部の亂に烏什の酋長霍吉斯兩端を持したりしかハ帝其反覆を恐れて京師

烏什の亂

烏什を平く

に召し哈密の阿布都拉を以て其代りとす阿布都拉暴戾なりしかは人民遂に亂を作し阿布都拉を殺す阿克蘓の辨事大臣卞塔海兵を率ゐて赴き援けたりしが利あらず既にして喀什噶爾の參贊大臣納世通伊黎の將軍明瑞等各兵を率ゐて赴援し遂に其城を圍みたり賊潜に其黨を遣はして各回城を煽し且援を敖罕布魯特に乞ふ然れとも回城敢て動かす諸國の兵も亦至らす賊外援なきを以て遂に首逆を縛して降り爭亂初めて平きたり（同卅九年）後二年を經て烏爾木齊の昌吉城に於て流人の亂ありしが幾もなくして平定せり是より後五六十年の間西域全く平なりき

第四節　西南諸蕃の叛服

緬甸を征す

緬甸に雍籍牙と云ふ者あり酋長麻哈祖の位を簒して自立し日に邊境を侵す（同十九年）清兵屢敗績したりしかは帝遂に大學士揚應琚に命して出征す賊兵木邦景線の土司を下して其勢頗盛なり會應琚病に罹りしかは兩廣の總督揚廷璋に命し滇に赴きて軍を治む（同卅一年）又雲貴の總督明瑞等進みて木邦に至れ

緬甸と和す

は敵戍風を望みて遁走す清兵勝に乘して進みしが（同卅二年）糧盡きしを以て歸らむとし敵兵の追襲を受け明瑞等皆戰死す既にして緬酋俘卒を歸して兵を罷めむことを請ひしが朝廷許さず大學士傅恒に命して大擧して進討す（同卅三年）傅恒金沙江に至りて大に敵兵を破り老官屯を攻めたりしかは賊將人を遣はし來りて欵を議す是に於て使者往返して和議始めて成り遂に師を班したりき（同卅四年）

初めて金川を征す

初め金川の土司莎羅奔叛して隣傍の土司を下し官兵を破りしかは雲貴の總督張廣泗に命し兵を率ゐて進勦す（同十二年）然るに諸將戰死し多く事機を失ひたりしかは大學士訥親に命し往きて師を視せしむ訥親廣泗と和せず又大に破られたり依て更に大學士傅恒に命して經畧し又岳鐘琪を起して共に征勦す（同十三年）恒鐘琪と頻に敵壘を破り軍勢頗盛なりしかは莎羅奔父子降り金川全く平きたり（同十四年）後莎羅奔の兄の子郎卡土司の事を主り漸く桀驁にして鄰境土司を犯す郎卡死し其子索諾木、僧桑格と鄂克什土司の地を侵す（同卅一年）

再金川を征す

索諾木又茸布什札の土官を誘殺し僧桑格も各土司を攻擊す依て大學士溫福及ひ尚書桂林に命し西南の兩路より進攻す二將連戰利を得て土地を復したりしが會桂林の部將大に敵兵に敗られたり依て阿桂を以て桂林に代ふ阿桂南路より賊巢を搗きしかハ僧桑格逃れて大金川に入れり(三十七年)溫福賊の險を扼するを以て進むを得ず部將をして小金川を守らしめたり時に索諾木諸降蕃を煽動したりしかハ諸賊蜂起し溫福遂に戰死し小金川の地また賊に陷れり既にして阿桂等進擊して遂に小金川の地を復す時に賊巢に二あり一を烏勸圍となし一を噶爾厓となす阿桂進攻して諸寨を下し其勢甚盛なりしかハ索諾木遂に僧桑格を酖殺して其尸を獻し已の罪を宥されむことを請ふ阿桂聽かずして攻擊益急なり(三十八年)遂に進みて烏勸圍を攻圍す索諾木遁れて噶爾厓に赴きしかハ官軍又進みて噶爾厓に會す(三十九年)索諾木窘急して遂に出て降れり是に於て金川また平きたり時に緬甸の酋長贅噶牙金川の平きしを聞きて大に恐れ使を遣ハして入貢したりき(四十年)

臺灣を平く

安南を征す

是の時に方りて山東の奸民王倫邪教を以て亂を作したりしが幾もなくして平定す(三十九年)後又循化の回教徒馬明心の亂あり河州を陷れて蘭州を犯したりしが亦遂に平けられたり(四十六年)既にして臺灣の民林爽文亂を作し彰化及ひ諸縣を陷れたり(五十一年)帝諸將に命して往き征せしめしが皆功をなす能ハず依て更に福康安、海蘭察に命して往き征す二人進討して文爽を擒にし盡く臺灣を平けたり(五十二年)尋て又安南の役起れり

初め安南王黎氏の臣に阮惠と云ふ者ありて亂をなす國王黎維祁出亡したりしかハ惠遂に其國に據れり帝黎氏の世々藩職を守りしを以て安南王を援けむとし兩廣の總督孫士毅等に命し諒山より路を分ちて進討す敵兵風を望みて遁走す淸兵富良江を渡り大に敵兵を破りしかハ黎氏の宗族皆來り附す依て維祁を安南國王に冊封し詔して師を班さしめたりしが孫士毅俄にかへらず既にして敵兵大に至りて淸兵敗績したりしかハ黎維祁また來り投す阮惠既に安南に踞し淸兵の再討せむことを恐れて罪を謝し降を乞ふ朝廷遂に其降

廓爾喀を征す

を允したりき(五十三年)

帝又廓爾喀を征す廓爾喀は西藏の西にあり初め後藏の仲巴呼圖克圖其弟舍瑪爾巴と事によりて相善からず舍瑪爾巴廓爾喀に後藏の封殖と仲巴の專恣とを告けて其入寇を促す是に於て廓爾喀遂に兵を起して入寇す時に邊將私に和を講し歲幣を送るを約せしが其約の如くならざるを以て復入寇して札什倫布を掠めたり帝福康安を將軍となし海蘭察を參贊となして進勦す清兵深入して敵兵を破りしかは廓爾喀大に懼れて降を乞ひしが許さず三路より進攻して六戰して六勝す且近傍の諸國に諭して進攻せしめしかは廓爾喀進退谷まりてまた降を乞ふ依て其降を許して師を班せり是より駐藏の兵を置きたりき(五十九年)

第五節　教匪海盜及ひ回部の亂

教匪の亂原

初め劉松といふ者白蓮教を以て衆を惑はし事顯はれて捕へられたりしが(乾隆四十年)其徒劉之協等四川陝西湖北の人民を教誘し多く黨與を集めて不軌を謀

れり尋て朝廷其事を知り同謀の徒を捕へたりしが獨之協は遁れ去りて獲る能はず依て天下に詔して大に搜索す(同五十八年)時に州縣の吏教匪を逮捕するを事とし大に暴虐を恣にす且貴州に苗族の亂ありて額勒登保の出征せるより四川湖南貴州等の民大に軍事に困み又私鑄を嚴禁したるを以て無賴の徒の業を失へる者多く人民頗亂を思ふに至れり(同五十九年)既にして帝位を太子永琰に傳ふ是を仁宗皇帝と云ふ(同六十年)

教匪の亂

仁宗の世に方りて教匪機に乘して湖北に起り遂に河南四川陝西甘肅に蔓延す湖廣の總督畢沅等兵を出して賊を殺すこと多かりしも賊の起ること益盛なり既にして諸將連に賊を破り大に其勢を蹙めたりしが四川の賊徐天德王三槐等又起り各衆數萬を擁して郡縣を抄掠す(嘉慶元年)額勒登保既に苗族の亂を平け更に兵を率ゐて湖北に至り諸將を助けて各路の賊を討す諸賊各地を橫行して侵掠益甚し既にして王三槐戰敗れて雲陽に走りしが(同二年)額勒登保遂に三槐を虜にし安樂坪を攻めて其餘黨を下す(同三年)帝諸將の功を成す能は

さるを以て專ら額勒登保に任す尋て劉之協徐天德等を擒にす額勒登保遂に諸將を分遣して大に各地の賊を勦して漸く平定に歸せり（自四年至七年）蓋此役は前後數歲を費し官軍と賊兵との死者甚多かりきと云ふ

時に海盜蔡牽沿海に出沒し勢頗猖獗なりしが浙江の提督李長庚大に之を破れり（同八年）既にして蔡牽臺灣を掠め粵賊朱濆と連合して浙を犯す長庚又諸鎭の兵を合せて賊を破れり尋て濆事によりて牽と分離す（同九年）牽遂に舟百餘艘を以て臺灣を犯し土匪萬餘を結びて府城を攻めて自ら鎭海王と稱す（同十年）長庚牽を臺灣に攻めて其船三十餘艘を焚獲したりしかは牽遂に遁れ去れり（同十一年）長庚牽を追ひて黑水外洋に至り賊の礟丸に中りて死す牽遂に安南海に入れり既にして安南より回り再朱濆と合す廣東の巡撫沆元計を以て二人を離間し濆また牽を捨て丶間に竄したりしが戰敗れて死し牽も亦浙兵に破られて死し海寇の亂全く平きたり（十三年）

尋て粵賊鄭乙の亂ありしが幾もなくして平定し（同十五年）天里教徒李文成河南に據りて亂をなしたりしも亦平

定に歸したり（同十八年）後又數年を經て回部の亂起れり

初め回部南路の參贊大臣斌靜荒淫にして人心を失ひたりしかハ故の博羅尼特の孫張格爾敖罕より來りて邊に寇す領隊大臣色普徵額擊ちて之を破りしかハ張格爾殘兵を率ゐて逃れ去れり（同廿五年）帝在位二十五年にして崩し皇子旻寧立つ是を宣宗皇帝と云ふ

宣宗の時に方りて張格爾屢喀什噶爾の近傍に寇す時に回部の人民多く其耳目たりしかは官兵の往きて賊を捕へむとする時には皆知りて遁れ去れり領隊大臣色彥圖兵を率ゐて塞を出てしがまた賊に逢はず遂に游牧の布魯特を縱殺す是に於て其酋長大に怒り所部を率ゐて官兵を山谷に追覆を張格爾も亦兵五百を率ゐて回城に突至す將軍慶祥大に敗れて阿克蘇に走れり敖罕の酋長も兵萬餘を出して張格爾を援け喀什噶爾を陷れ遂に英吉沙爾、葉爾羌、和闐を下す帝甘陜の總督楊遇春に命して哈密に赴き諸軍を會して進勦す（道光五年）官軍進みて賊を破り遂に喀什噶爾を復す張格爾既に遁れ去りしか

ハ其親戚と殘兵とを禽にし英吉沙爾、葉爾羌を復し尋て又和闐を復せり張格爾時に諸部に寄食したりしが反間の言によりて官兵既に撤して喀什噶爾空虛なりと信し兵五百を率ゐて來襲し官軍の要擊に逢ひて虜にせられたり帝依て敖罕に諭して其家屬を縛して獻せしめむとす敖罕使を遣ハして賀を表したれと其家屬を獻せず帝遂に敖罕の互市を絕ちたり（同八年）既にして敖罕の酋長「モハメット」流寓の各夷萬餘を合して喀什噶爾、葉爾羌を攻圍し回莊を焚掠す時に官軍賊を恐れて出てざりしかハ賊皆飽颺して去れり（同九年）帝敖罕に諭して復互市を許し又喀什噶爾の參贊大臣を移して葉爾羌に屯駐せしめたり（同十一年）時に湖南の猺趙金龍の亂ありしも遂に平定に歸し（同十二年）國內事なかりしが數年を經て鴉片の事にて英國と戰端を開くに至れり

第六節　鴉片の戰爭

英國ハ明の時に始めて支那に通し清の聖祖世宗の際には廣東にて貿易をなしたり是より鴉片の輸入頗多くして害毒を流すこと少なからず高宗及ひ仁宗

の時に前後兩回其函を燒きたることありしも其輸入は益盛にして宣宗の時には三萬四千函に上れり湖廣の總督林則徐上書して其害を論す帝依て則徐を以て廣東の總督となす則徐廣東に至りて英商に諭して所有の鴉片を獻せしめむとし兵力を以て臨みしかは英商已むを得ずして一千餘函を呈す則徐其全數を出さしめむとせしに英商聽かず依て食料を與へざりしかハ英商大に困み遂に其全數を獻す則徐悉く其函を燒棄し且互市を禁したりしかハ英人遂に入寇の計をなせり既にして英艦三艘廣東に入りて曰く互市を復すれは可なり然らされは一戰あらむのみと則徐應せず英艦依て清船三艘を擊破して去れり則徐其再來を慮りて兵備を修す既にして英艦復來りて廣東に寇し香港を攻め遂に亞米利加人に介して互市を乞ひたりしが許されず（同十九年）英人依て大に戰艦を發して來り舟山を攻め下し又乍浦に逼りて其城を下し進みて寧波を犯す清兵拒き戰ひて大に破られたり時に英將別に一隊を率ゐて北地に進み書を送りて和を議し且遼東に往來して地勢を察す帝欽差大臣琦

普をして答へしめて曰く此地事を議するに便ならず宜く廣東にありて待つべしと英將乃去りて廣東に至れり帝欽差大臣伊里布と琦善とを遣はして和を議し盡く則徐の爲したる所に反し其設けたる各地の兵備を撤す且則徐の過激にして變を致せるを以て其職を褫奪す（同二十年）然るに英人陽に兵を撤したりしが又浙東を侵し廣東を擾す帝大に怒りて伊里布琦善の職を褫奪し則徐を起用して浙東を經理し皇弟綿瑄親王を大將軍となし兵五萬を率ゐて廣東に赴く英兵退きて船に入りしが又兵を出して上陸し大に清兵を破れり時に英人來り言ふて曰く兵を六十里外に斥け銀六百萬兩を納れなば兵を收めむと清將其言の如く兵を斥けたりしかば英兵も廣東を去れり既にして英の後軍至りて其勢大に振ふ英兵遂に軍を分ちて厦門を取り更に北に向ひて進み定海を侵す總兵葛雲飛等戰死す英軍遂に定海を取り又鎭海を下し寧波を取れり清兵舟山を襲ひてかたす又寧波鎭海定海を攻めて勝たず英兵遂に乍浦を攻む都統長善等戰死し城遂に陥りたり英兵進みて楊子江を奪はむとそ

清兵大に懼れて江口を守りしが英兵の來り襲ふに及ひて皆遁れ去れり英兵遂に吳淞を攻めたりしが總兵陳化成戰死し城又陥りたり（化成ハ最勇名あり英人の懼れたる所なり）是に於て英軍の勢破竹の如く遂に進みて鎭江を攻め下す南京大に震ふ帝初め戰を主としたりしが是に至りて防く可からさるを知り伊里布を起し欽差大臣耆英と英軍に赴きて和を議す英等英將と會して七條の條約を訂結し鴉片の償金として二千六百萬兩を償却し香港を英國の管轄となし廣州福州寧波厦門上海の五港を開きて互市場となし互に俘虜を返し且擅に法を執りて英人を刑するを得さること等を定めたり是に於て和議全く成り兩國共に兵を解くに至れり（同廿二年）

第七節　髮賊の興起（剃頭せさるを以て髮賊と稱す）

鴉片戰爭の後廣西廣東の地大に饑ゑて盜賊蜂起し朝廷に抗せる者少からす時に廣西の桂平縣に洪秀全と云ふ者あり天主教を以て徒弟を教誘し國勢の漸く衰へさるを見て遂に兵を金田村に起す馮雲山、蕭朝貴、楊秀清、韋昌輝、石

洪秀全の興起

達開等其部下に屬す秀全天父を耶火華と名け耶蘇を長子とし巳を次子となし（耶蘇を天兄と稱す）遂に直言寶誥の諸書を作りて各地に配布したりしかは來り從ふ者頗多かりき然るに廣西の巡撫鄭祖琛其事を忌みて奏せす秀全の勢益盛なるに及ひ始めて其事を奏す帝在位三十年にして崩し太子奕佇立つ是を文宗皇帝と云ふ

秀全太平天國と稱す

帝雲貴の總督林則徐を欽差大臣となし廣西に遣はす則徐途にて死せしかは兩江の總督李星沅を以て其代とす時に秀全の兵各地に充滿し其勢益強く遂に進みて官兵を破り太平王と稱し象州の境に入りて廣西を侵す飛報頻に京師に至りしかは朝廷更に大學士賽尙阿を欽差大臣となし諸將を率ゐて往援す秀全既に永安を陷れ國號を太平天國と稱し自ら天王となり大に功臣を封し楊秀清を東王に蕭朝貴を西王に馮雲山を南王に韋昌輝を北王に石達開を翼王となす（咸豐元年）秀全道州桂陽を下し更に兵を出して長沙を攻めたりしが下す能はず又洞庭に出てゝ岳州を下し遂に民舟五千を奪ひて東下し漢陽武

武昌漢陽を下す

昌を下す（同二年）朝廷賽尙阿の功なきを以て兩廣の總督徐廣縉を以て其代とす然るに廣縉も亦遷延して進まざりしかは提督向榮及ひ大學士琦善を以て欽差大臣となし賊兵を防かしむ是の時に方りて秀全の勢益盛にして舟楫江を蔽ひて下り九江、安慶、蕪湖を陷れ遂に金陵を取れり秀全一軍を留めて江南を守り自ら大軍を率ゐて北京を衝かむとしたりしが或者の言によりて果さず更に林鳳祥を遣はして東下す鳳祥遂に鎭江を陷れ楊州を下す秀全既に金陵に據りて制度律令を設け蓄妾及ひ買娼を禁し弓足の害及ひ奴婢の弊を禁す其他耶蘇の法によりて改革をなしたる者ありかくて向榮等金陵の外營を攻めて功をなす能はず琦善等楊州を攻めて克たず敵將林鳳祥遂に進みて滁州を陷れ鳳陽を下す時に侍郎曾國藩親の喪によりて湘鄉にありしが詔を受けて鄕勇を募り明の戚繼光の兵制に倣ひて湘勇の營を設け毎營を五百人とす國藩先つ衡山劉陽の賊を討平す是より湘勇の名始めて顯はれたり時に賊兵安徽河南の各城を下し山西直隷を侵す且江南の賊兵も亦頗強盛なりき

金陵を下す

秀全の政治

曾國藩の勤王

武昌漢陽を復す

賊復武昌漢陽を下す

秀全其名將を殺す

國藩軍を督して衡州にあり大に戰艦を治め砲礮を具へ水陸の軍を整へて遂に衡州を發す是の時賊兵猖獗にして沿江の各城を下し武昌漢陽に據りて大に勢威を振へり（同三年）國藩諸軍を會して武昌を取る策を議し水師は長江を扼し陸師ハ洪山を扼し大に賊を破りて武昌を下す彭玉麟等又漢陽を復す國藩又賊將陳玉成を九江に破れり（同四年）親王僧格林沁河北の賊を破りて林鳳祥を擒にす然るに賊將楊秀清又漢陽を取り武昌の防守嚴ならさるを見て進攻して其城を下す既にして湖北の巡撫胡林翼兵を分ちて進擊し遂に漢陽武昌を攻めたりしが賊堅く守りて下らす國藩は水師を率ゐて江西の賊を討す時に賊兵臨江に入り南昌に迫りしかは國藩兵を出して防き戰へり（同五年）賊兵九江より進みて麻城を下し新州を陷れ民粮を掠めて武昌漢陽を控制せむとす官軍大敗す石達開又大軍を率ゐて金陵より武昌に向はむとす胡林翼拒き戰ひて其軍を破れり賊將楊秀清秀全を除きて自立せむとも秀全其計を知りて韋昌輝をして秀清を殺さしめたりしが諸賊の服せさるを恐れて又昌輝

再武昌漢陽を復す

賊勢尚盛なり

を殺せり是より先き馮雲山蕭朝貴等皆死し賊の舊將の殘れる者は石達開のみなりしが其勢毫も衰へす襄陽の匪徒又賊に應して其勢頗盛なり胡林翼賊兵の益盛ならむことを恐れて大擧勦滅の策を議し遂に漢陽を復し又武昌を復す國藩も亦江西の諸縣を克復す（同六年）官軍又楊州及ひ鎭江を復し（同七年）進みて金陵を攻めたりしが城固くして拔けす時に賊將陳玉成衆を率ゐて湖北の諸州を犯し更に麻城に來りて諸縣を下す賊兵又福建を犯す者あり曾國藩父の喪によりて湘鄕に歸りしが戎事の急なるを以て起復して軍務を辨す然るに賊勢益強く陳玉成また楊州を下し六合三河を下す官軍共に戰ひて大敗し遠近震動す（同八年）玉成また廬州を下し其勢頗盛なりしが後遂に胡林翼に破られ又李世忠に破られたり石達開は江西より湖南を犯し遂に郴永の諸州を下し廣西に侵入し更に廣東を犯し其勢大に振ふ時に秀全も圍城の官軍を破り遂に丹陽を下す賊兵又蘇州嘉興を陷れたりしかく內亂の甚きに際して更に英佛と釁を構ふに至れり（同九年）

第八節　英佛の來寇及ひ髪賊の平定

英清紛議の原

初め英人貿易の爲めに支那船を借りて自國の旗章を掲け十二名の雇支那人を乘せて厦門より廣東に來りしに清國の官吏其船に來り恣に十二人を捕へて去れり盖髪賊の黨類なりといふ然れとも此の所爲は清英二國の間に結びたる條約に背きしを以て船主より英の領事「パークス」に訴へたり「パークス」依て兩廣の總督葉名琛に向ひて十二名を還さむことを要求し且曰く若し聽かされは兵力を以て從事せむと葉琛依て其人を領事廳に渡しゝに「パークス」受けすして曰く宜く船中に送還すへし然らされは兵力を以て從事せむと然るに葉名琛其答をなさゞりしかハ英人大に怒りて黄浦河岸の砲臺を破り又書を名琛に贈り城中に入りて事を議せむことを望みしが議協ハす英人又各砲臺を擊破し遂に廣東の市街を燒却す是に於て清廷より和議を請ひ償金四百萬兩を拂ふの約をなし遂に天津に於て改めて條約を結びたり（咸豐七年）一年を

第一の和約

經て英國の使臣は北京に至りて改正したる條約を取替さむとし水師提督と

太沽の砲擊

共に大沽江口に來りて其由を通す然るに英艦の江中に入るに及ひて砲臺より烈く砲擊したりしかハ英艦遂に引き還し使臣と提督とは上海に回り三艘の瀛船を留めて江口を扼す是の時佛國の使臣も亦同行して難に逢へりしかハ各使を本國に遣ハして清廷の罪を訴ふ是に於て兩國共に兵を出すことゝなれり（同九年）既にして兩國の軍艦來攻し英艦ハ天津港口の北に泊し佛艦ハ其南に泊し共に北塘を攻め下し又太沽の砲臺を擊破す時に朝廷使を遣ハし戰を休めて和を議せむとする旨を告く英佛の將曰く先つ宜く砲臺を明け渡すべしと清兵遂に其言に從ひしかハ兩國の軍艦は遂に進みて天津に向へり朝廷復使を遣ハして再和を議せむとせしに議かなはず依て英佛の兵は北京に向ひて進みたり其兵凡二萬餘人とすかくて通州に至れは親王僧格林沁兵を率ゐて迎戰す兩國の軍大に其兵を破り遂に進みて北京の近傍に至り又清兵を破りて北京に入り圓明園の宮殿を焚く時に帝既に逃れて熱河に在り恭親王をして和議を求めしむ且露人も亦其間に入りて調停す是に於て遂に償金

英佛の來攻

英佛軍北京に入る

第二の和約

千八百萬兩を出し更に牛莊、登州、臺灣、潮州、瓊州、九江、漢口の諸港を開くの約をなし和議全く成れり是の年又魯國の求めに應じて黑龍江北の地を以て大磯と交換を是より魯國の版圖は朝鮮の國境に達せり（同十年）

曾國藩賊を討す

かく外寇の盛なるに方りて髮賊の勢猖獗を極めたり朝廷曾國藩を兩江の總督に任じ又欽差大臣となして江南の軍務を督す賊將石達開貴州より四川に入らむとして果さず又湖南に侵入して綏寧東安を下す（同十年）陳玉成又黃蘄の二州を下す曾國藩兵を出して賊軍を破り浙江の巡撫曾國荃（國藩の弟）太常卿左宗棠等も亦屢賊兵を破りて各地を回復す金陵の勢漸く蹙まりしかは秀全其將李秀成等を遣はして浙江を犯し官軍の兵力を分たむとす賊兵又上海に逼りしかは上海の官紳相議し人を京師に遣はし外國の兵を借りて賊を討せむことを申請す帝在位十一年にして崩し太子載淳立つ是を穆宗皇帝と云ふ（同十一年）

賊軍上海を犯す

賊兵既に上海に逼りしが英米佛の國人官軍を助けて防戰す時に上海の守呂

洋鎗隊を編制す

宋の人を募りて兵となし米國人華爾を統領となし松江を克復す又處士王韜の建議によりて洋鎗隊を編制す後屢勝を奏したりしかは遂に常勝軍の名あるに至れり後華爾死して米國人白齊文代りて其兵を統べ屢戰功を立てたりしが賞其望に協はず遂に賊に降りて北征の策を献す然るに其策幸にして用ひられす白齊文既に去りて英國の工兵士官戈登常勝軍の將となりて屢奇功を立てたり是より官軍の勢頗強く江蘇の巡撫李鴻章等屢賊を破り曾國荃彭玉麟等も亦屢勝を奏す賊將陳玉成は壽州にて擒に就き石達開は四川に入りて侵掠をなしたりしか亦擒にせられ李秀成等も亦屢利を失へり（自同治元年至二年）

金陵を復し髮賊を平く

曾國藩先つ金陵を取りて賊の根本を拔かむことを謀り諸軍を會して之を圍みたりしかは城中食つきて拒き戰ふ能はす秀全も亦事の爲すへからさるを知り遂に藥を呑みて死しぬ官軍遂に金陵を復し其餘黨を平けたり蓋秀全の兵を起しゝより是に至る迄十五年なり十六省の地皆其沒掠する所となりしが纔に回復をることを得たるは實に清室の幸と云ふべし

諸功臣を賞す

帝曾國藩の功の大なるを以

て侯爵を授けて世襲となし曾國筌、李鴻章等を伯爵となし其他彭玉麟等に皆厚賞を與へたりき

第九節　臺灣及び伊黎の紛議

髮賊平定の後、數年を經て曾國藩を兩江總督となし(後二年を經て薨す)李鴻章を直隷總督となす時に日本より使を遣はし書を清廷に贈りしかは兩國初めて好を通することとなれり(同治八年)後日本の領事來りて通交の事務を統す(同十一年)然るに

日本臺灣を討す

幾もなくして臺灣の事にて紛議を生しさり初め日本の備中の人及ひ琉球の民臺灣に漂流したる者ありしか生蕃に殺されたり日本生蕃の地を以て清廷の領地にあらすとなし遂に問罪の師を起す陸軍中將西郷從道蕃地事務總督となり兵艦五隻を率ゐて臺灣に至り蕃人を擊破し牡丹社酋を斬戮す生蕃十八社の酋長相續きて降附す從道遂に龜山に營して專ら勦撫を務めたり時に清廷は生蕃の地を以て其所屬となし日本に向ひて兵を撤せむことを求めたりしか日本聽かす會日本の兵臺灣の西部を襲はむとする訛言あり總理船政大臣沈葆楨を遣はし福建の舟師を帥ゐて臺灣に赴きて其狀形を視察す既にして日本參議兼內務卿大久保利通を全權辨理大臣となし來りて臺灣の事を議す利通上海に航し遂に北京に入れり攝政恭親王等利通に會して生蕃の所屬を論す稽遲すること數日、議猶決せす利通事の諧はさるを見て憤然として去らむとす會英國公使「ウエード」兩國の間に入りて調停を謀り

日本と和す

清國は討臺の擧を是認し撫恤銀十萬兩と軍費銀四十萬兩を償ふことを許し日本も亦師を臺灣より班すことを許し和議全く成れり利通遂に臺灣に至り撤兵の令を傳へて凱旋す既にして清廷李鴻章の建議によりて公使を日本及ひ西洋各國に遣はすこととなれり(同治十三年)帝在位十三年にして崩し嗣なかりしかは醇親王の子載湉位に即く是を今上帝となす

西域の亂

初め髮賊の亂に際して回教徒西域に亂を起し諸城を下しゝか敖罕の酋長も其機に乘し張格爾の子「ブズルク」に兵を授け「ヤクブベク」を將となして喀什噶爾に入らしめたり後「ヤクブベク」自立して國政を整理し回教徒と戰ひて諸

露人伊黎を占領す

城を下し新疆の大半を領す此の騒亂に際し露人は西比利亞より兵を出して「キルギース」人を制馭し遂に進みて伊黎の地方を占領せり（同治九年）清廷既に髮賊の亂を平け左宗棠を以て陝甘の總督となし新疆の回復を圖れり宗棠兵器を整へ軍紀を明にし連年兵を用ひて土地を回復し帝の世に至りては天山北路の各城を復す然れとも伊黎は猶露國の占領に歸し吐魯番以西は「ヤクベブク」に屬せり清兵遂に進みて喀什噶爾に向ふ時に「ヤクブベク」の勢既に衰へ部下の叛く者多かりしかは清兵に抗する能はさるを知り藥を飲みて死しぬ是に於て喀什噶爾の兵皆散し諸城悉く降り天山南路も亦清兵の復する所となれり（光緒三年）

左宗棠西域を定む

初回の伊黎談判

清廷遂に伊黎を回復せむとし其返還を露國に求めしに露國答へて曰く若し清國にて境上の安全を保護し且其多年伊黎を治めたる費用を償はゝ其要求に應すべしと依て清廷は崇厚を全權大使となして露國に遣はし其條約を定めむとを（同四年）崇厚聖彼德堡に至り露國の委員と商議し遂に「リワヂヤ」の地に於て假條約十八箇條を結ひたり中に清國より銀五百

再度の伊黎談判

萬「ルーブル」を償ひ且「テケス」河の上流なる兩岸の土地を露國に讓與せる文あり然るに崇厚の復命せるに及ひて其土地を讓與するに就て物論大に起り崇厚を以て權限を越えて條約を結ひたる者とし牢獄に下し遂に其條約の廢棄を望みたり是に於て兩國各兵を境上に出して開戰の準備をなし左宗棠は哈密に在りて清兵を統制し陸軍大將「コーフマン」は露兵を指揮して新疆の境上に軍す而して清廷は更に曾紀澤（國藩の子）を以て全權大使となし聖彼德堡に至りて再度の談判を開かしめたり然るに數回の談判の後兩國各一歩を讓ることとなり「ホルゴース」河以西の地を以て「テケス」河岸の地の代となし且五百萬「ルーブル」の償金を改めて九百萬「ルーブル」となし條約二十條を定めて平和に局を結ひしかは兩國の兵も亦境上より退きたりき（同七年）

（附言）清國近年の事記すべき者少なからず然れとも未た精密なる取調を經さるか爲めに筆を茲に擱くこととなせり他日再版の際に至らは或は增補することあらむ

○明の帝系

㈠太祖元璋　在位卅一年
　懿文太子標
　　㈡惠帝允炆　同四年
㈢成祖棣　同廿二年
　㈣仁宗高熾　同一年
　　㈤宣宗瞻基　同十六年
　　　㈥英宗祁鎭　同十四年
　　　㈦景帝祁鈺　同八年
㈧英宗祁鎭　復位八年
　㈨憲宗見深　同廿三年
　　㈩孝宗祐樘　同十八年
　　　⑪武宗厚照　同十六年
　　興獻王祐杬
　　　⑫世宗厚熜　同四十五年
　　　　⑬穆宗載垕　同六年
　　　　　⑭神宗翊鈞　同四十七年
　　　　　　⑮光宗常洛　同數日
　　　　　　　⑯熹宗由校　同十年
　　　　　　　⑰毅宗由檢　同十七年
　　　　　　福王常洵
　　　　　　　⑱帝由崧　同一年
　　　　　　　⑲帝聿鍔　太祖の裔
　　　　　　桂王常瀛
　　　　　　　⑳帝由榔　同十七年

○淸の帝系

㈠太祖努爾哈齊　在位十一年
　㈡太宗皇太極　同十七年
　　㈢世祖福臨　同十八年
　　　㈣聖祖玄曄　同六十一年
　　　　㈤世宗胤禛　同十三年
　　　　　㈥高宗弘曆　同六十年
　　　　　　㈦仁宗永琰　同廿五年
　　　　　　　㈧宣宗綿寧　同三十年
　　　　　　　　㈨文宗奕佇　同十一年
　　　　　　　　　㈩穆宗載淳　同十三年
　　　　　　　　醇親王奕譞
　　　　　　　　　⑪今帝載湉

第三章　明淸の開化

第一節　制度

（官制）　明の初めは元の制によりて中書省を設け左右丞相を置きたりしが幾もなくして其制を廢し中書の政を六部（吏戸禮兵刑工）に歸す是より六部の尙書は頗權力を有して全く宰相の實あり就中吏戸兵の三部は最盛なりき時に殿（中極

殿、建極殿、文華殿、武英殿）閣（文淵閣、東閣）大學士は顧問に備はりしのみなりしが仁宗の時より經師の恩を以て尊重を受け漸く權力を有するに至り世宗の時にハ嚴然として宰相の實を有し政務の樞機ハ內閣に歸するに至れり又御史臺ハ名を都察院と改め左右都御史を長とし百官を糾劾し冤枉を辨明す通政使司ハ通政使を長とし內外の章奏を通達す此の外に宗人府（宗正寺に同じ）詹事府、翰林院、國子監、及ひ太理、太常、光祿、太僕、鴻臚の諸寺ありて其掌る所ハ前代に異ならす清に至りてハ大略明の制により內閣にハ大學士（四人）協辦大學士（二人）ありて機務を贊理し六部にハ每部に尙書、左右侍郞等の官ありて其政令を總掌す都察院にハ左右都御史あり通政使司には通政使ありて其掌る所ハ明に同じ宗人府以下の諸寺も亦明に異ならず唯軍機處、總理各國事務衙門、理藩院の如きハ明になき所なり軍機處ハ世宗の時に設けたる者にして大學士及ひ六部の尙書の中より撰ひて軍機大臣となし軍國の大事を處分す總理各國事務衙門は宣宗の時に設けたる者にして軍機大臣或ハ六部の尙書の中より撰ひて其大臣

て崇教を致し郭子儀の如きも景寺を修めたりかく景教の勢頗盛なりしかは德宗の時に至りて大秦寺の僧景淨等相圖りて景行流行の碑を立てたり然るに武宗の時に佛寺と共に景寺を廢し其僧を還俗せしめたりしかは其勢遂に衰頽し碑は地中に沒せらるゝに至れり後數百年を經て明の末世に至り碑は再堀り出されたりしかは初めて當時景教の盛なりしを知るを得たりと云ふ（碑文ハ天道溯原にあり）

(二)（三論宗）中論、百論、十二門論によりて宗を立つるが故に三論宗と稱す印度にてハ文殊を高祖となし馬鳴を次祖となし龍樹を三祖となす支那にてハ鳩摩羅什の三論を譯したるを初めとす羅什の門人道濟三論を講して曇濟に傳ふ曇濟より道朗、僧詮、法朗を經て吉藏に至て此宗を大成す、吉藏ハ隋の嘉祥寺の僧なり、吉藏より前を古三論と稱し又北地の三論と稱す、吉藏より後を新三論と稱し、又南地の三論と稱す、唐に及ひてハ惠遠、智拔、惠喩、法敏の諸德出てゝ其勢益盛なりき、此宗の我邦に傳ハりたるハ推古天皇の時に吉藏の弟子高麗の僧惠灌の來朝したる時にありと云ふ、

（律宗）　律藏を宗とするか故に律宗と稱す、律に四種あり、十誦律、四分律、僧祇律、五部律是なり、今の律宗の主とする所は四分律にあり、印度にては曇無德を以て開祖となす、魏の時に印度の僧曇柯迦羅來りて四分律を譯す、是れ支那にて律の出てたる初めなり、姚秦の覺明も頗律に通し、後魏の法聰始めて四分律を講敷す、後諸德相つきて出て各疏を作りて四分律を弘めたれと、諸部雜亂して區分明ならさりしが、唐に至て智首律師五部區分鈔を作れり、後此宗遂に三分す、相部の法礪、南山の道宣、東塔の懷素是なり、就中道宣の派最盛なりき、此宗の我邦に傳りしは、孝謙帝の時に、唐の僧鑑眞の來りしにあり

（華嚴宗）　華嚴經を主となすか故にかく名けたり、印度の師承は畧す、支那に在ては隋の法順を元祖となす、法順華嚴法界觀、五敎止觀を作りて、唐の智儼に傳へ、智儼は賢首に傳ふ、賢首華嚴の疏を作り大に此宗を弘めたりしが、賢首の沒後に、其弟子惠苑師說に背きて、此宗の防碍をなしたりしが、後百餘年を經て澄觀宗密相つきて起り、頗其勢を挽回せり、此宗の我邦に傳りたるは聖武帝の時に、唐の僧道璿の華嚴宗の章疏を齎し來りしを始めとす、尋て新羅より審祥法師講來り、其宗大に興れりと云ふ、

（禪宗）　禪那を宗とするか故に禪宗と稱す、（禪那は譯して定と云ふ）印度に於ては摩訶迦葉を始祖となす、摩訶迦葉より二十八傳して達摩に

至る、達摩支那に來りて禪宗の開祖となれり、達摩より惠可、僧粲、道信を經て唐の弘忍に至り、始めて南北の二派に分れたり、弘忍の弟子に慧能、神秀の二人あり、神秀は北地に行化せしかは北宗と稱し、慧能は南地に行化せしかは南宗と稱す、北宗は後世分派を生せさりしも、南宗は七派に分れたり、慧能の門人に南岳の懷讓と靑原の行思とあり、是を南岳靑原の二派となす、後南岳の門下より臨濟潙仰の二派を出し、靑原の門下より曹洞雲門法眼の三派を出し、又臨濟の門下より楊岐黃龍の二派を出したり、是を南宗の七派となす、後又黃檗の一派あるに至れり、其我邦に傳りたるは三宗あり一を臨濟宗となす即後鳥羽帝の時に僧の榮西宋に入りて虛庵敞禪師に就きて臨濟の正宗を承け歸りて建仁寺を建てたり、二を曹洞宗となす即後堀河帝の時僧の道元宋に入りて傳受し歸りて永平寺を建てたり、三を黃檗宗となす後光明帝の時に明の黃檗山の隱元禪師來りて萬福寺を立てたるに始まれり

（法相宗）　諸法の體相を明にする宗なるを以て法相宗と名つけり、解深密經を本經となし、唯識論を本論となす、唐の玄奘印度に入り、戒賢論師に學ひて歸り、初めて法相宗を弘めたり玄奘の弟子窺基百本の疏を作りて、始めて門戶を立て唯識述記を本典となし、大に唯識の蘊奧を開きたり、時に僧圓測あり、窺基と肩を並べて法相を講敷す、されと自已の見解を以て正宗を亂す弊ありしか

は、窺基の弟子惠詔了義燈を著はし、惠詔の弟子智周演秘を作り、窺基又別に樞要を著せり、是より其勢稍盛なりしか宋に至ては衰へたり、此宗の我邦に入りたるは孝德天皇の白雉四年にあり、即僧の道昭唐に赴きて玄奘に就きて法相宗を學び、歸朝の後に元興寺を建てたり、後齊明帝の四年に、智通智達の二僧入唐して、玄奘及び窺基につきて學び、歸りて後に又此宗を弘めたり

（天台宗）　開祖智顗の天台山に棲みたるによりてかく名つけたり、此宗は法華經を本經とし、智度論、涅槃經大品經を參觀し一心三觀の妙理を明かにするにあり、初め北齊の惠文智度論、中觀論によりて此理を悟り、南岳の惠思に授け、惠思より智顗に授く、智顗二師につきて初めて此宗を大成す、後灌頂法華天宮左溪の諸師を經て、湛然に至れり湛然は中唐の人にて、頗著述に富めり、後八傳して智禮に至て一宗を興す、是に於て山家山外の二流に分れたり、山家は智禮の傳ふ所、山外は悟恩の傳へたる所なり、此宗の我邦に傳りたるは桓武帝の時にあり、即延暦二十三年に僧の最澄唐に赴き天台山國淸寺の僧道邃に就きて、天台宗を學び、歸りて延暦寺を建てたるなり、

（眞言宗）　秘密の眞言を宗とするか故に眞言宗と名つけたり、印度に在ては大日如來を敎主となす、後龍樹龍智等の諸菩薩に傳はり、龍智より金剛智に傳ふ、金剛智支那に來りて此宗の開祖となれり時に不空と云ふ者、金剛智に從ひて來りしが、後又印度にかへり、更に瑜珈の秘密を受け、再支那に來りて經論を譯す、故に此宗の盛なるは不空の力多しとす、不空の弟子に惠果等八人ありて、布敎に從事せり、此宗の我邦に入りたるは、平城帝の時にあり、初僧空海唐に入りて惠果に從ひて眞言宗を受け、歸りて之を弘布せり、蓋是より前に眞言の傳來ありしも、其全く弘布せるは空海にありといふ

（浄土宗）　浄土を希ふを主とするを以て浄土宗と名けたり、此宗の主とする所は三經一論なり、三經は無量壽經、觀無量壽經阿彌陀經にて一論は浄土論是なり、印度に於ては馬鳴龍樹世親の諸德を祖とし支那にては二流あり、曰く惠遠流是は廬山の蓮社にて惠遠を主とし、慈愍元照等に傳はれり、曰く善導流是は終南の派にて、善導と始とす、善導高宗の時に光明寺に居りて、大に此宗を弘めたり、此宗の我邦に興りたるは高倉帝の承安四年に、圓光大師源空の黑谷を出て、洛東吉水に居りて專修念佛を唱へたるにあり、蓋本邦の浄土宗は善導流にて四派ありと云ふ、（各宗の源流は十二宗綱要及び三國佛敎略史等に據れり）

第四節　技藝

（音樂）　隋の文帝の時ハ猶北周の樂を用ひて聲律正しからざりしが陳を平くるに及ひて宋齊の舊樂を得、且陳の樂官を得たりしかハ雅樂漸く備ハれり然るに煬帝ハ頗淫曲に耽り齊周梁陳の樂工の子弟と民間の音によき者とを擇ひて大樂に付したりしかハ雅樂頗其處を失ふに至れり唐に至りても高祖の初ハ音樂を改むるに暇なく猶隋樂の舊に由れり後海内の平定するに及ひて太常少卿祖孝孫に命して雅樂を考正す孝孫梁陳の舊樂ハ呉楚の音を雜用し齊周の舊樂ハ胡戎の伎に渉る者あるを以て南北を斟酌し古音を參考して大唐の雅樂を作り太宗の時に至りて奉れり凡十二和樂（豫和、和順、永和、肅和、雍和、壽和、太和、舒和、昭和、休和、正和、承和）にして四十八曲とす（玄宗の時又三和樂を作り併せて十五和樂とす）又文武の舞あり文の舞ハ七德の舞と稱し（元秦王破陣樂と稱す）武の舞ハ九功の舞と稱す其他に上元の舞あり併せて三大舞となせり樂器にハ鐘、磬、柷敔、晉鼓、節鼓、琴瑟、箏、筑、竽、笙、簫、篪、塤、錞于、鐃鐸の類ありて其種類甚多し玄宗の時ハ龍池樂、聖壽樂、小破陣樂、光聖樂等を作り樂部を分ちて立部伎と坐部伎となす

且玄宗最音樂を嗜み左右教坊を置きて俗樂を教授したりしかは當時教坊の生員二千人あり太常の樂工は萬餘戸に上れり其後戰亂によりて音樂の盛衰常なかりしと雖も宣宗の時には猶太常の樂工は五千餘人、俗樂は一千五百餘人ありと稱す五代の際に至りて多少の沿革ありしも大略唐の舊に由り漢は十二和を改めて十二成（成禋、順成、裕成、肅成、騂成、壽成、政成、弼成、慶成、鎬成、晟成、胤成）となし周は更に十二順（昭順、寧順、肅順、感順、治順、忠順、康順、雍順、溫順、禮順、禋順、福順）となし世宗の時に至り又王朴に命して雅樂を更定したることありき

（書畫）　唐の世には選擧に筆法の遒美なるを要せしより書に巧なる者多し虞世南、褚遂良、歐陽詢、張旭、顏眞卿、柳公權等最著はれたり虞世南は秀逸の趣あり褚遂良ハ蕭散の風あり歐陽詢ハ妍緊にして小楷を能くし張旭ハ意態縱橫にして最草書を能くし其喜怒哀樂は皆書に顯はれたりと稱す顏眞卿は遒勁秀拔にして其人となりに類す柳公權ハ顏氏より出てたれとも亦よく新意を出して別に一家をなしたりき

唐の世畫を能くしたる者も亦少なからず太宗の時に閻立本あり玄宗の時に李思訓あり思訓は唐の宗室にして好みて金碧の山水を畫く筆格遒勁なり時人其左武衛大將軍たりしを以て李將軍と稱せり是を北宗派の祖となす思訓の子昭道も亦よく山水を畫きたりしかは時人稱して小李將軍と云へり時に呉道玄（字ハ道子）と云ふ者あり亦畫をよくす嘗て大同殿に於て嘉陵江を寫し一日にして畢れり思訓も亦命を受けて嘉陵江を寫したりしが數月を經て纔に畢れり玄宗見て嘆じて曰く思訓數月の功道子一日の跡皆其妙を極めたりと又同時に王維あり詩を巧にして且畫を能くす常に破墨の山水を畫く雲峯石色皆其眞に迫れり是を南宗派の祖となす後張璪といふ者維の法を傳へたり五代に至りては荊浩關同の二人最畫名あり浩は世亂を避け太行山の浩谷に隱れて自ら浩谷子と號し山水樹石を畫きて自ら娯みたり同は浩の門人に尤も好みて秋山寒林の圖を作れり其筆簡にして氣壯景少くして意多しといふ

第五節　產業（附）貨幣

（農業）唐の初に斑田の制を用ひ租庸調の法を行ひて大に心を民事に用ひたりしかは農業漸く盛になり初は一匹の絹を以て纔に一斗の米に易えたりしが後には斗米の價四五錢となるに至れり故に太宗の時には民物蕃息し千里の遠きに行くも糧を齎さゞりきと云ふ後玄宗の時宇文融の言を用ひて戸田を撿括したりしが州縣の吏正田を羨田となし編戸を客戸となし虛數を張りて上旨を希ふ者多かりしより天下の騷擾を招きたり盖此の時は斑田の制漸く破れ租庸調の法も亦行はれず富豪兼併の弊起りて貧民業を失ひしかは買者を罰して地を還さしめたるか如きこともありしも亦其勢を救ふ能はず農業の情態にも頗變更を來せり

唐の世に多く米穀を產する地は江南地方にして今の浙江安徽の諸省を最となす故に毎年數百萬石の租米を船に積み楊子江より運河を泝りて淮水を經過し遂に黃河に出で又洛水に入りて洛陽に輸し更に長安に送るを常とせり

後其運輸の法屢變りしが租米を運送することは依然として廢せず東方爭亂の際よりは漢水を泝りて長安に送れり又絹絁紵麻の産する地も多く宋亳鄭濮曹懷諸州の絹及び復州常州の紵、宣潤舒蘄黃岳諸州の火麻を最上品となせりと云ふ

（商業）　京師に市令の官ありて百族交易の事を掌りしこと猶周の司市の職の如し市には標を建て肆を陳ねて品物を分ち秤斗の二物を以て市を平にし上中下の三價を以て市を均くす弓矢長刀は官の標準によりて造り且工人の姓名を題して後に販賣を許す他の諸物も亦然り若し偽濫の物を以て交易する時は官に沒し短狹の量に中らざる者を販賣したる時は主に還す凡て市は日午の擊鼓を以て集り日暮の擊鉦にて散ずるを例とす是れ令の定めたる所なれども一般に行はれたる者にあらざるべし

邊境の交易を掌るは諸互市監ありて交易にて得たる馬駝驢牛等は各其色を分ち齒を具して所隸の州府に申す州府は更に太僕に申す太僕乃官吏を遣はし

て受領し上馬に印記して京師に送るなり當時外國交易の事は詳ならずと雖も版圖既に西方に擴まりて蕃客の往來も頗多かりしかば交易も亦隨ひて行はれたるべし彼の阿剌比亞人の如きは唐の初に廣東、乍浦、寧波、福州等の地に來つて交易をなしゝことあり唐の高祖使を遣はして好を修めたりしかば阿剌比亞王も亦其母舅賽爾を遣はして來朝せしめたりといふ

唐の貨幣は高祖の時に開元通寶を鑄たるを始めとし爾後歷代鑄造したる者少なからず高宗の時に乾封泉寶を鑄、肅宗の時に乾元重寶を鑄、代宗の時に大歷元寶を鑄、德宗の時に建中通寶を鑄、懿宗の時に咸通元寶を鑄たり開元通寶は徑八分にして重二銖四參なり其他の錢は開元通寶に準して大小稍異れり

支那史卷四終

欠

MISSING

王と稱したりしが世宗の世に至り大に道教を好みて佛教を斥け京師の寺院を毀ちたることあり爾後佛教の勢漸く振はず清に至りて高宗の如きは各省に於て新に寺院を立つるを許さず又民間の獨子及び男子の年十六以下の者、女子の年四十以下の者は出家するを許さず故に益衰頽に歸し天台、華嚴、法相、眞言、淨土、の諸宗は纔に典型を存するに止れり然れども喇嘛の一派は益盛なり

喇嘛は紅教と黃教との別あり衣服の色によりて名を附す紅教は元の時は思巴の創めたる者にして黃教は明の時宗喀巴の創めたる者なり宗喀巴は成祖の時西寧衛に生れ初め紅教を修めたりしが其弊あるを見て遂に自ら黃教を起し憲宗の時西藏に死しぬ其死する時に兩大弟子なる達頼喇嘛と班禪喇嘛とに化身轉生を以て其教を傳ふることを命ぜり是より兩喇嘛の死する時には必轉生の所を指示すかくて其所より嬰兒を迎立して傳燈とし兩喇嘛更々其教を司れり達頼喇嘛は西藏の布達拉に居り班禪喇嘛は札什倫布に居れり兩

教の異なる所は讓教は妻を娶らさ化身轉生を以て其教を傳ふれとも紅教は妻を娶りて其子に傳ふるなり今日は紅教の勢振はす蒙古西藏の地皆黄教を奉せりと云ふ

(道教)　明の時に太祖道士張正常を眞人となし正二品の秩を授け其僚佐を贊教、掌書と稱す後世宗の時に至りて大に道教を尊信し宮中に宮殿を建立し邵元節に尊號を加へて道教の事を總領せしめ後又陶仲文に尊號を加へて道教を總領せしむ二人の死するに及ひて元節を文康榮靖と謚し仲文を榮康仲肅と謚す四字の謚は古來なき所なりと稱す穆宗位に即きて道士の姦惡なる者を誅し大に道教を抑したりしか猶勢力を有し淸に至りても各地に道觀あり北京の白雲觀には道書三千卷を藏すと云ふ要するに其術を修養練丹符籙となし修養は名山大澤に入りて氣を練り神を養ふにあり練丹は丹砂を煞煉して服餌し長生不死を謀るにあり符籙は神符を書して魑魅病魔を避くるにあり是れ古より行ひ來りし所なり道士は皆黄衣黄冠を着けて肉食妻帶を

なさす道官は京師に道錄司あり府に道記司あり州に道正司あり縣に道會司ありて道士を統督するなり

(耶蘇教)　耶蘇教は曾て景教と稱し唐の武宗の時に佛教と共に排斥せられしより久しく跡を絶ちたりしが元の時には西人の支那に來りし者多かれは(マロコ、ポオロの如きは其一人なり)其教も亦再東漸せるヿ疑なし然れとも當時佛教の勢盛なりしかは別に勢を有する能はさりしならむ明に至りては西洋諸國との交通益開け西人の來りし者多く耶蘇傳教師も亦少なからす神宗の時に利瑪竇來りて宣教に從事し上海に於て天主堂を築きて十字街をなす今日其名を呼びて觀星台と云ふ當時徐光啓等其教を尊信し上奏して天主堂を京師及ひ各省に創立せり然れとも盛に行はるゝに至らさき朝廷まては傳教師の天文暦法に明なるを以て暦法を講究せしむる用に供し利瑪竇の如きは乾坤体義の著あり(熊三拔は表度說を著はし陽瑪諾は天問略を著はし龍華民湯若望等は徐光啓と共に新法算書を撰せり)宣教師の如きは欽天監に入りて天文の考察を司れり淸に至りても亦傳教師を用ひて欽天監となし暦

法を司らしめ北京に二箇の天主堂を建てたり爾後傳教師の來れる者益多くして各省の都會にハ必教會堂の設けあり今帝の初（紀元二年五百四十九年）に伊國羅馬府の宗教總會に於て支那全部の宣教區畫を五區に分ちて（直隷及ひ滿洲蒙古を一區とし山西、山東、河南、陝西、甘肅を二區とし湖南、湖北、浙江、江西、安徽、江蘇を三區とし四川、雲南、貴州、西藏を四區となし廣東、廣西、福建、香港を五區となす）布教に從事し或は醫院を立て或は育兒院を設け錢財を惜ますして貧民を賑はすか故に信徒の數頗增加したりと雖も人民多くは其教を喜はず時に或は宣教師を殺し或は教會堂を毀燒するか如きこともあり（曾て天津にて佛國宣教師を殺したることあり昨年又長江沿岸にて教會堂を破りしことあり）

（回教）　回教は元の時より漸く蔓延し支那の西部に流行す明より清に至りて其最盛なる地を新疆に於ける天山南路及ひ甘肅、陝西、山西、直隷の諸省とす其他各地到る處に教徒ありと雖も西藏と蒙古とは喇嘛教の盛に行はれ居るを以て回教の浸染を受けず其教徒の間は甚相親みて相扶け他教の者と婚姻を通せず死者あれハ白布に包みて葬り棺槨を用ひず七日に一回寺院に集りて經を誦し禮拜をなす清廷に對してハ屢反を企て回部の亂を起しゝが皆

平定せられたり高宗の時に其教徒を八旗の軍中に編入したるハ其歡心を得て反亂を防かむとの計畧なりと云ふ

第四節　技藝

（音樂）　明の太祖の時雅樂を起さむとし諸臣に命して考定せしめたりしが古音に返す能ハず成祖も亦黃鐘の律を問ひしに能く應する者なし英景憲孝の世にハ樂器ハ徒に具文たるに過ぎず世宗制作を以て自ら任し音律に明なる張鶚、李文察を用ひたりしが終に成る能ハさりき要するに明の時ハ大抵漢唐宋元の舊によりて其名を交易し聲容の次弟、器數の繁縟ハ觀るべかりしと雖も雅俗雜出の譏を免かれず清に至りても亦雅樂の觀るべき者なしと云ふ

（書畫）　明の初めにハ王冕王履の徒畫を以て名あり後沈周出でゝ大に畫名を博す周ハ世に謂ふ所の石田先生にして峯巒烟雲波濤花卉鳥獸蟲魚皆其妙を極めたり同時に唐寅、文徵明あり寅ハ詩を能くし、又書を能くす書法沈鬱、

風骨奇峭なりと稱す徵明ハ書を工にし又畫を能くす世人其畫を許して趙孟頫倪瓚黃公望の體を兼ねたりと稱す陳獻章ハ經學に深くして又畫に巧なり運筆遒勁にして觀るべき者多し又關思も山水に善きを以て名あり董其昌ハ書を巧にし又黃公望の山水を師とし後宋人の風を學ひたり自ら曰く余の畫文徵明に較すれハ各短長あり徵明の精工具體ハ我か及はさる所なりと雖も古雅秀潤に至りては更に一籌を進めたりと其山水樹石烟雲流潤し神氣具足す明末の冠と稱すべし

清初に至りて歸有光の孫に昌世と云ふ者あり山水を能くし兼ねて蘭花木竹を作り又草書を能くす徐枋も亦山水を能くし頗荊關の法あり又好みて芝蘭を畫く平生隱居して出でず海內の遺民と稱せられたり毛奇齡は經學に深きか上に書を工にし又畫を能くす猶明の陳獻草の如し鄭燮は最蘭竹に工なるを以て名あり書は隸楷行の三體を以て相參す惲格は山水に工なりしが後花卉を作り沒骨花の一派を創めたり且題語書法に工なりしより南田の三絕と

稱す（南田は惲格の號なり）孫克莊は山水は馬遠米芾を學び花鳥は徐熙（南唐人）趙昌（宋人）に似たり就中石竹蘭花を最精妙なりと稱す沈南蘋は花鳥を能くし我邦に來りて畫名を傳へたり其畫ける者頗多し

（製造）製造の物品は中世に比すれは頗劣りたるか如しと雖も其產出は少なからす北京までは七寳燒、假珠玉（珊瑚、眞珠、瑠璃、白玉）を製す山東は絹綢を製するを以て名あり河南は南陽綢を製し江蘇浙江は布帛綢緞を製し安徽は紙筆墨を製するを以て名あり江西は陶器と紙とを製す湖南四川も亦紙を製するも多し廣東は假玉器、椅榑、漆器等を製し象牙細工の如きは最發達せり其他戰艦銃砲等の製造は多く西洋の技藝を師とし天津に河東機器局、海光寺機器局あり上海に江南機器局あり江寧に南京製造局あり福州馬尾にも造船所ありと云ふ

第五節　產業（附貨幣）

（農業）農業は明より清に至りて別に異なりたるを見ず耕作の法は世界に

於ても頗進歩せる者なれとも大器械の耕作の如きは未た行なるゝに至らす江蘇、安徽、浙江、江西、湖南の諸省は水田多くして灌漑の利あり稻米を産するを最多し就中江蘇浙江を以て最となす福建、廣東、廣西も亦稻米を産すと雖も其額少なし河南湖北は水田少なくして旱田多く亦頗稻米を産す山東、直隷、山西、陝西、甘肅及ひ滿洲地方は高原多くして小麥大麥高粱を産す農民も亦傍牧畜をなせる者多し茶は外國貿易の盛なるより各地ニ繁植し江蘇、浙江、福建、安徽、江西、河南、湖北、湖南、四川及ひ山東、廣東、雲南、貴州、ニ産するに至れり蠶絲と棉とは江蘇、浙江、河南、安徽、湖北、湖南、四川の數省に産す要するに農民ニは數萬畝を有する富豪なきにあらすと雖も一般は貧困なる者多しと云ふ

（商業）　明の初に元の關市の税を改めて頗簡約に從ひしか後漸く增加し唯農具と書籍とを除くの外は大抵三十分の一の税を課せり又在京兵馬指揮に命して市司を領し三日毎に一たひ街市の度量權衡を閲し牙儈の物價を稽へ

しめたり後宣宗の時に鈔關を設けて河川通行の船の貨物を積載せる者に税を課したりしかは商賈は頗困難を受けたり清に至りても内地の各所に關を設けて通過の貨物に税を課し且運送の貨物に釐金税を課するに至りしより商賈の不便少なからす今日商賈を分ちて字號（問屋）行商（仲買）舖商（小賣商）となし山西江西の人は本部各地及ひ塞外の地に旅して商業をなす者多く浙江、福建、廣東の人は各開港場に出て又遠洋を渡りて商業する者多し故に各國到る處に支那人の跡あり

外國貿易は明の時に寧波、泉州、廣州に市舶司を設けて提擧官を置き寧波は日本に通し泉州は流球ニ通し廣州は占城、暹羅及ひ西洋各國ニ通す殊に日本との交易は頗盛なりしも時ニ侵掠をなすことありしかは遂に其制限をなし十年に舟二艘、人二百と定め勘合の表文を以て驗となせも然るに世宗の時に市舶の事によりて倭寇を招きたりしかは遂に市舶司を罷めたり是より倭寇甚く交易も亦中絶す後三市舶司を復したりしが幾もなくして廢し尋てまた復す

るに至れり明の末には西班牙、葡爾牙、荷蘭の諸國皆來りて互市をなし英國の如きも亦來り通す然れとも其貿易の地は廣州を主とせるか如し又陸地に於ける貿易は馬を主とし開原の南關東關及ひ廣寧にて蒙古地方の馬騾と交易をなしゝか後開原の東關と廣寧の兩關とを廢し宣府大同にて馬市を開きたり清に至りても西洋各國との交易は廣州にて盛に取引をなしゝか宣宗の時に至り鴉片の戰にて上海等の五港を開くこととなり大に貿易の面目に變化を與へたり尋て英佛來寇の後更に潮州等の七港を開きしより益貿易の盛を極めて今日は二十二の開港場（天津、牛荘、芝罘、上海、鎮江、蕪湖、九江、漢口、宜昌、重慶、寧波、溫州、福州、厦門、臺灣、打狗、淡水、雞籠、汕頭、廣州、瓊州、北海）あるに至れり陸地の貿易は聖祖の時に露人の愛琿、恰克圖に於て貿易場を開けるを初めとす後伊黎條約よて伊黎、哈密、喀什噶爾等を以て露清の交易場と定めたりき

東洋諸國には磁器、絹綿、藥材、砂糖等を輸出し西洋諸國にも茶、絲、砂糖、綿を輸出す東洋諸國よりは木材、乾魚、昆布、漆器の類を輸入し西洋諸國よりは阿

片（英國を主とす）棉布毛布等を輸入す其輸出入の額は概左の如し（光緒七年の計算なり）

輸入　七千四百三十三萬〇二百二十八兩

輸出　六千七百十四萬、七千六百八十兩

貨幣は明の時に洪武通寶、永樂通寶、宣德通寶等を鑄、又別に大明交鈔を造りて六等に分ち（一貫、五百文、四百文、三百文、二百文、一百文）百文以下は銅錢を用ひ他は專ら交鈔を通行せしめたり清に至りては康熙通寶、乾隆通寶の如き歷代鑄造せる者ありと雖も政府發行の紙幣なし然れとも各銀行より發する手形は信用ありて紙幣の用をなす又銀塊を以て貨幣の流通を助け居るのみならす開港場の如きは西洋貨幣を通用すと云ふ

明清大事年表

日本	紀元	明	事項
長慶天皇	二千〇二十八年	洪武元年	太祖の即位〇大都を下す〇兵制を定む
	二千〇二十九年	同二年	上都を下す〇學制を定む
	二千〇三十年	同三年	諸子を封す〇應昌を下す
	二千〇三十一年	同四年	巴蜀を平く
後龜山天皇	二千〇四十年	同十三年	胡惟庸の反
	二千〇四十一年	同十四年	雲南を平く
	二千〇五十年	同二十三年	胡惟庸の獄
後小松	二千〇五十一年	同廿四年	再諸子を封す
	二千〇五十三年	同廿六年	藍玉の獄
	二千〇五十八年	同三十一年	太祖の崩去

明 太祖

支那史卷六終

天皇	紀元	年號	事項	明帝
後小松天皇	二千〇五十九年	建文元年	惠帝の即位〇燕王の起兵〇	惠帝
	二千〇六十二年	同四年	南京の落城〇成祖の即位〇	成祖
	二千〇六十七年	永樂四年	安南を征す	
	二千〇七十年	同八年	阿魯台を征す〇再安南を征す〇	
稱光天皇	二千〇七十四年	同十二年	瓦剌を征す〇安南を平ぐ	
	二千〇七十八年	同十六年	五經大全等を頒つ〇安南の亂	
	二千〇八十二年	同二十年	阿魯台を征す	
	二千〇八十四年	同廿二年	成祖の崩去	
	二千〇八十六年	宣德元年	宣宗の即位〇高煦の反	宣宗
後花園天皇	二千〇九十六年	正統元年	英宗の即位	英宗
	二千〇九十九年	同四年	王振の專恣	
	二千百〇九年	同十四年	瓦剌の入寇〇英宗の就虜	
	二千百十年	景泰元年	景帝の即位	景帝
	二千百十四年	同五年	瓦剌の亂〇小王子の立	
	二千百十七年	天順元年	英宗の復位	英宗
	二千百二十年	同四年	石亨の反	
後土御門天皇	二千百二十五年	成化元年	憲宗の即位	憲宗
	二千百三十七年	同十三年	汪直の專恣	
	二千百四十年	同十六年	海西の入寇	
	二千百四十二年	同十八年	汪直の貶死	
	二千百四十八年	弘治元年	孝宗の即位	孝宗
	二千百五十五年	同八年	哈密を經理す	

天皇	年	年號	事項	帝
皇	二千百六十二年	同十四年	小王子の入寇	宗
後柏原天皇	二千百六十六年	正徳元年	武宗の即位○劉瑾の専恣	武宗
	二千百六十九年	同四年	寘鐇の反○劉瑾の誅	
	二千百七十一年	同六年	江彬の寵	
	二千百七十九年	同十四年	宸濠の反	
	二千百八十二年	嘉靖元年	世宗の即位○前年江彬を誅す	世宗
後奈良天皇	二千百九十六年	同十五年	小王子の入寇	
	二千二百〇二年	同廿一年	俺答の入寇	
	二千二百〇三年	同廿二年	嚴嵩の専恣	
	二千二百〇八年	同廿七年	俺答の入寇○嚴嵩の跋扈	
	二千二百十二年	同三十一年	倭寇の侵掠	
	二千二百二十二年	同四十一年	嚴嵩の死	

天皇	年	年號	事項	帝
正親町天皇	二千二百二十三年	同四十二年	倭寇の平定	宗
	二千二百二十七年	隆慶元年	穆宗の即位	穆宗
	二千二百三十年	同四年	俺答の歸服	
	二千二百三十三年	萬暦元年	神宗の即位	神宗
	二千二百四十二年	同十年	張居正の死	
	二千二百四十四年	同十二年	清太祖兵を起す	
	二千二百四十六年	同十四年	清太祖尼堪外蘭を下す	
	二千二百五十二年	同二十年	日本朝鮮を征す○朝鮮を救ふ	
後陽成天皇	二千二百五十七年	同廿五年	日本再朝鮮を征す	
	二千二百六十七年	同三十五年	東林の黨爭	
後	二千二百七十四年	同四十三年	東林の貶黜○挺撃の案原	
	二千二百七十九年	同四十七年	清太祖明兵を破る	宗

水尾天皇　明正天皇　後

皇紀	年号	事項
二千二百八十年	泰昌元年	紅丸の案原〇移宮の案原
二千二百八十一年	天啓元年	東林の起用
二千二百八十四年	同四年	魏忠賢の専恣〇東林の貶黜
二千二百八十八年	崇禎元年	毅宗の即位〇魏忠賢の貶死〇清太宗の即位
二千二百八十九年	同二年	李自成張献忠亂を作す
二千二百九十二年	同五年	清太宗明兵を破る
二千二百九十七年	同十年	清太宗國號を清と稱す〇張献忠湖北を犯す
二千二百九十八年	同十一年	清太宗朝鮮を下す
二千三百〇三年	同十六年	清太宗松山を下す〇李自成襄陽に據る〇
二千三百〇四年	同十七年	李自成京師を陥る〇清世祖立つ〇清兵京師に入りて自成を追ふ
二千三百〇五年	弘光元年	福王の立〇清兵南京を下す

光宗　熹宗　毅宗　宗

光明天皇　後西院天皇　靈元天皇　東

皇紀	年号	事項
二千三百〇六年	隆武元年	唐王の立〇清兵江南浙東を下す
二千三百〇七年	永暦元年	桂王の立
二千三百十一年	同五年	鄭成功の進取
二千三百十四年	同八年	清兵兩廣を下す
二千三百十八年	同十二年	鄭成功長江沿岸を侵す〇呉三桂雲南を下す
二千三百二十二年	康熙元年	聖祖の即位〇鄭成功臺灣に據る〇成功の死去
二千三百三十三年	同十二年	呉三桂の反
二千三百三十四年	同十三年	耿精忠の反〇鄭經の入寇
二千三百三十六年	同十五年	尚之信の反〇耿精忠の降
二千三百三十八年	同十七年	尚之信の降〇呉三桂の死
二千三百四十二年	同廿二年	臺灣を平ぐ
二千三百四十七年	同廿六年	清露の條約

清

天皇	紀元	年號	事項	清帝
山天皇	二千三百五十年	同廿九年	噶爾丹を征す	聖祖
	二千三百五十六年	同三十五年	再噶爾丹を征す	
	二千三百五十七年	同三十六年	噶爾丹の死	
中御門天皇	二千三百七十五年	同五十四年	策妄阿拉布坦の入寇	
	二千三百八十年	同五十九年	西藏を下す	
	二千三百八十一年	同六十年	臺灣の亂を平く	
	二千三百八十二年	同六十一年	聖祖の崩去	
	二千三百八十四年	雍正二年	青海を平く	世宗
	二千三百八十九年	同七年	準噶爾を征す	
	二千三百九十五年	同十三年	準噶爾と和す	
櫻町天皇	二千三百九十六年	乾隆元年	高宗の即位	高
桃	二千四百〇七年	同十二年	金川を征す	

天皇	紀元	年號	事項	清帝
桃園天皇	二千四百十四年	同十九年	準噶爾を征す○緬甸邊境を犯す○	高
	二千四百十七年	同廿二年	○準噶爾を平く○回部の亂	
	二千四百二十二年	同二十七年	回部の平定	
後櫻町天皇	二千四百二十四年	同廿九年	烏什の亂を平く	
	二千四百二十六年	同卅一年	緬甸を征す○金川の亂	
	二千四百二十九年	同三十四年	緬甸と和す	
後桃園天皇	二千四百三十二年	同三十七年	金川を征す	
	二千四百三十五年	同四十年	金川を平く	
孝格	二千四百四十年	同四十六年	回教徒亂を作す	宗
	二千四百四十七年	同五十二年	臺灣の亂を平く	
	二千四百四十八年	同五十三年	安南を征す	
	二千四百五十四年	同五十九年	廓爾喀を征す	

天皇　仁孝天皇

二千四百五十六年	嘉慶元年	仁宗の即位〇白蓮教匪の亂
二千四百六十二年	同七年	教匪の亂を平く
二千四百六十三年	同八年	海賊沿海に寇す
二千四百六十八年	同十三年	海賊を平く
二千四百七十三年	同十八年	天里教徒の亂
二千四百八十一年	道光元年	宣宗の即位
二千四百八十五年	同五年	回部の亂
二千四百八十八年	同八年	回部を平く
二千四百九十二年	同十二年	湖南の猺亂をなす
二千四百九十九年	同十九年	林則徐鴉片を焚く
二千五百〇一年	同廿一年	英兵の來寇
二千五百〇二年	同廿二年	淸英の和約

仁宗　宣宗

孝明天皇　今上天皇

二千五百〇九年	同廿九年	洪秀全の興起
二千五百十年	咸豐元年	秀全國號を立つ
二千五百十二年	同三年	秀全金陵を下す〇曾國藩兵を起す
二千五百十六年	同七年	英淸の紛議〇回部の亂
二千五百十九年	同十年	英佛の來寇〇天津の和約〇黑龍江北の地を露國に與ふ
二千五百二十二年	同治二年	洪秀全を平く
二千五百二十九年	同九年	露國伊黎を占領す
二千五百三十三年	同十三年	日本臺灣を征す
二千五百三十七年	光緒三年	左宗棠回部を平定す
二千五百三十八年	同四年	初度の伊黎談判
二千五百四十一年	同七年	再度の伊黎談判

文宗　穆宗　今

37
33

37
33